

高山歯科医学院編『歯科手術論』の書誌学*

森山徳長 小幡哲夫 長谷川正康**

I. はしがき

明治17年医術開業歯科試験が施行されてから、明治22年、23年には、それまでの私塾教育を脱皮して東京歯科専門医学校や高山歯科医学院が次々と開校し、開業試験を目指す学校教育が始まった。学生教育用の教科書や参考書は、いきおい欧米歯科医学書の翻案に依らざるを得なかったが、歯科の各科目を網羅したものとしては、高山歯科医学院講義録全24巻がある。

これは明治23年10月より毎月規則的に発行され、25年9月を以って全24巻を完結した。引続いて高山紀斎は、講義録を下敷として学院の教科書体系を整えるべく、以下の5巻をシリーズとして順次刊行した。

1. 歯科手術論 完 明治25年8月8日出版
(明治30年1月30日再版)
2. 歯科汎論 完 明治25年9月7日出版
3. 実用歯科器械学 明治25年9月28日出版
4. 歯科冶金学 明治26年1月23日出版
5. 歯科薬物学 全 明治28年3月8日出版

本書(図1)は高山歯科医学院課程講述の筆記に基づいて、新たに書下して上梓された単行本教科書の、第一番目として出版された。巻末広告に



図1 『歯科手術論』初版扉

Fig. 1 Title Page of the First Edition of the Operative Dentistry

* Studies on the Bibliography of "The Operative Dentistry" published by the Takayama Dental College

** Norinaga MORIYAMA, Tetsuo OBATA & Masayasu HASEGAWA (Tokyo Dental College 東京歯科大学)

本稿要旨は、第15回日本歯科医史学会総会・学術大会(1987年10月2日、日本大学会館)に於て、小幡が口演した。

は歯科汎論、歯科冶金学、歯科器械学、歯科薬物全書、歯科病理大全が近刊となっているが、最後の一冊は、高山歯科医学院時代には単行本とはならなかった。

ただし、次に続く『歯科汎論』が講義録の『歯科一班』の寸分違わぬ模写であるのに対して、本

表 1 初版と再版の相違

Table 1 Comparison between the First and the Second Edition

	初 版	再 版
印刷年月日	明治25年 8 月 7 日	明治25年 8 月 7 日
出版年月日	明治25年 8 月 8 日	明治25年 8 月 8 日 明治30年 1 月30日 再版
正 価	壱円五拾銭	壱円八拾銭
編 纂 所	高山歯科医学院	高山歯科医学院
発 行 者	高 山 紀 斎	高 山 紀 斎
印 刷 人	大久保 銈次郎	仁 科 衛
印 刷 所	秀 英 舎	厚 信 舎
発 売 所	島 村 利 助	島 村 利 助
組 版	A 5 判, 上部に余白を残してあり. 1 頁14行×25字. 本文217頁. (例言 4 頁, 目次 3 頁)	A 5 判, 天部余白なし. 1 頁15行×35字. 本文150頁. (例言 3 頁, 目次 3 頁)

書は充填学, 口腔治療学を体系的にまとめた, 書き下し教科書である. すなわち, 当時米国において行われた Operative Dentistry の体系を忠実に写したものであった. 歯科医学叢談 3 号英文学院案内には, 本書は Operative Dentistry 後者は Outline of Dental Science と訳されている.

東京歯科大学図書館史料室には, 本書の初版(帯赤黄色・洋装幀) 2 冊, 再版(藤色・洋装幀) 2 冊が所蔵されている. 再版のうち 1 冊は山田平太氏寄贈である. 以下にその書誌学的概要を報告する.

II. 『歯科手術論』の書誌学

〔構成〕 洋クロス装, 扉—1, 例言—4, 目次—3, 本文—217, (挿図—78) 奥付—1, 広告—8(初版)

〔装幀〕 初版・再版ともに, 縦書, 漢字片仮名交り文で書かれているが, 洋装幀クロス張り, 表紙と背皮に金文字で歯科手術論の文字が刻印されている (14.5×21.5 cm).

〔扉〕 図 1 に示すように 初版は, 「高山歯科医

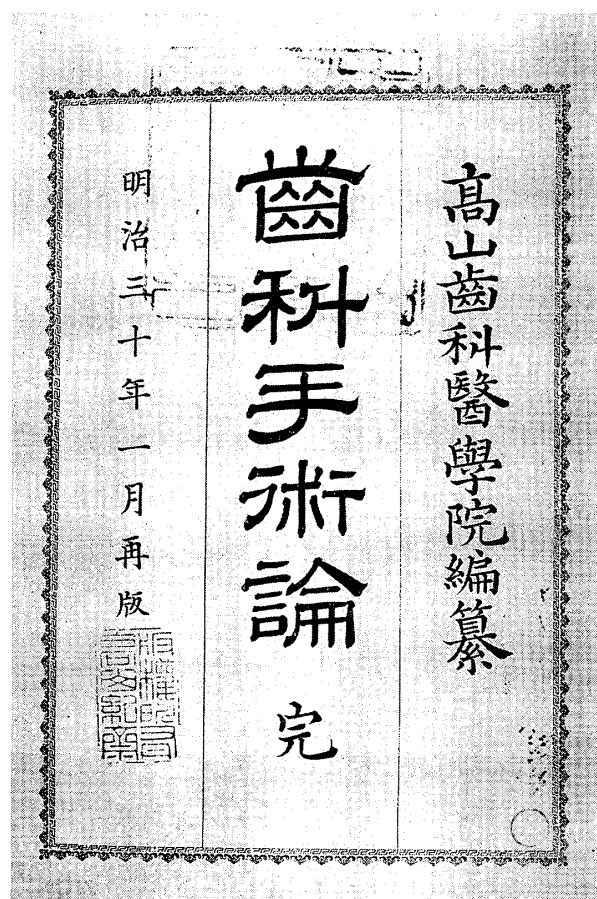


図 2 再版扉

Fig. 2 Title Page of the Second Edition

学院編纂, 歯科手術論 完, 明治 25 年 8 月 出版 (版權所有高山紀斎の朱印)」と 3 行に篆書体で書かれ, 再版では 3 行目が明治31年 1 月再版 (版權印) となっている (表 1, 図 2).

〔組版〕 初版は 1 頁が 25 字詰 14 行で天部に書込のための余白を残しているが, 再版は 35 字詰 15 行で天部の余白は無い (表 1).

〔例言〕 このシリーズでは, 著者緒言にあたる語彙として例言または附言を用いている. 著者高山紀斎は, 本書例言でその目的を以下のように述べる (図 3).

『本書は私の歯科医学院の講義の筆記によって編纂したもので, 学理を明かにし, 技術的な巧みさを教えて蘊奥を究めることを目的としている. 従って欧米の大家の最新の学説を参考とし, 私の多年の臨床経験を加味して肝腎な点を記載するようにした. 歯牙組織学を先ず説いて基礎を固め,

臨機応変の手術を行えるように配慮した。

最近では、学問の進歩に伴って、いたずらに新奇に片より、実際的手技をおろそかにし、世間の「歯抜き」より劣るような臨床家もいるので、歯科一般の声望を損うことのないように、本書を公にする次第である。

歯科手術学は、歯牙を保存し、咀嚼力と審美性を保ち、人工歯など用いずに天から与えられた歯牙の資質を保護する、歯科で最も大切な学科である。

世間には衛生を説くにあたって、空気・食物・家屋の良否だけを論じて、身体の事に言及せず、咀嚼作用が生活の入門であり、寿命の根本であることをおろそかにする者が多い。それが、私が大声を挙げて歯牙の保全を力説する理由の一つである。

また歯が欠けるために審美性を失う人が多い。

歯痛の療法は拔牙だけでこと足りるというような施術者は、人生の幸福が何であるかをわきまえない馬鹿者といわねばならない。

歯科医術の職掌とするところは、いわゆる衛生、治病の外に、審美的知識を兼ねそなえていなければならない。またそれが仁慈博愛の徳美から出ていることについては、誰も異義をさしはさむ者はいないはずである。読者諸君は、どうか時日をかけて練習を重ねて、歯科の歯科たる巧妙の実をあげるよう努力して欲しい。

本書の文章は一般に使われている平易な文章を用いて理解を容易にするよう心掛けてある。

明治25年8月上旬

高山歯科医学院長 高山紀斎誌』

〔目次〕以下の20章に分つ。（原文縦書、旧漢字片仮名）

歯科手術論	目次
第一章 組織総論	1
第一節 標本調整法	10
第二節 象牙質	18
第三節 白垩質	25
第四節 歯頸部	31
第五節 珥瑯質	33
第六節 歯根骨膜	40

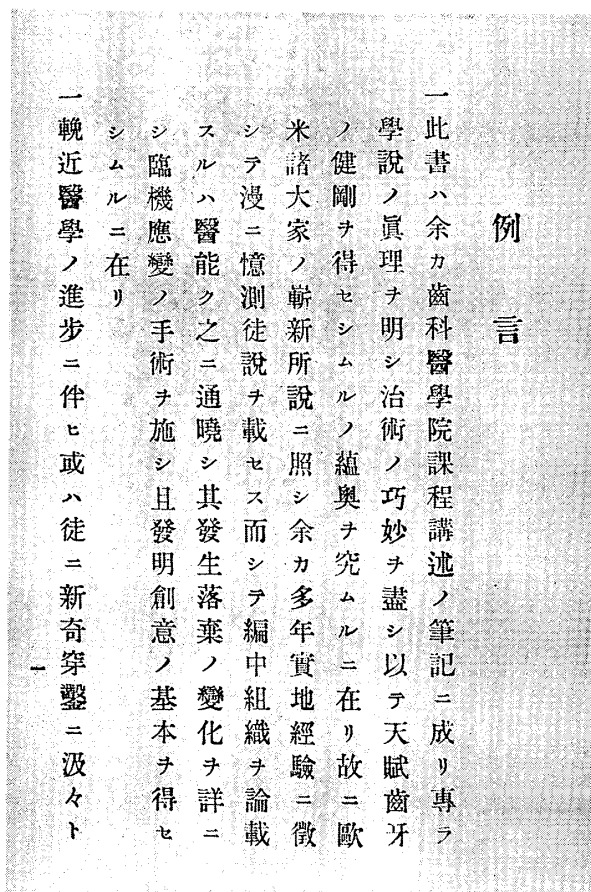


図3 例言

Fig. 3 Preface

第七節 常態歯髓組織ノ微細造構	49
第二章 齒列矯正及腐蝕予防法	61
第三章 防湿護謨ノ使用法	71
第四章 防湿護謨用鉄鈕	75
第五章 充填材調製論	78
第一節 金箔	78
第二節 錫	81
第三節「アマルガム」(汞収金属)	82
第六章 充填用槌	84
第一節 電気槌	85
第二節 改良電気槌ノ用法	105
第七章 咀嚼面空窩ノ充填法	108
第八章 唇面及頬面空窩ノ充填法	111
第九章 磁製塊充填法	114
第十章 齒ノ隣接面充填法	119
第十一章 齒ノ外囲補修ニ係ル準備	124
第十二章 外囲補修及腐蝕蔓延予防法	136

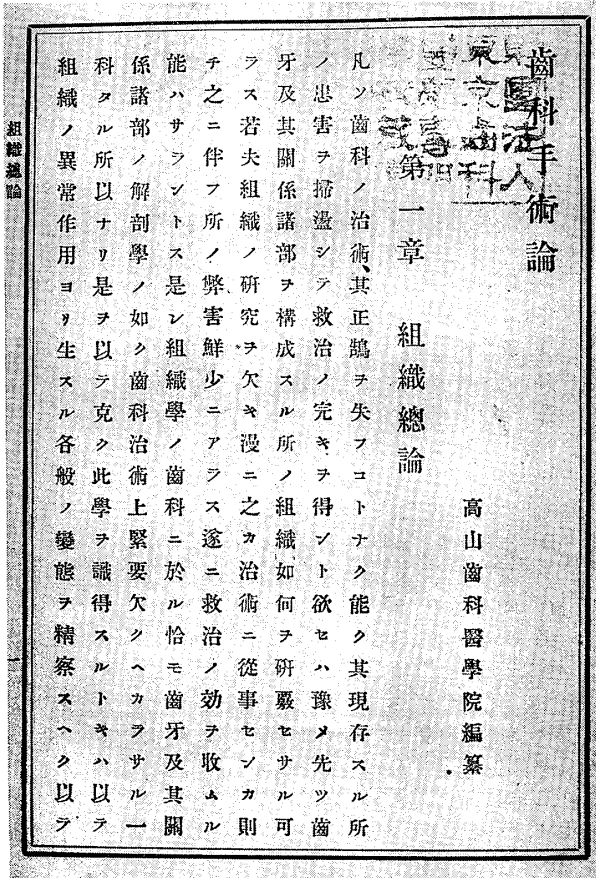


図 4 齒科手術論本文第一頁

Fig. 4 The First Page of the Text

第十三章	充填術ニ関スル原則大要	145
第十四章	脆弱ナル瑱瑯質ヲ金ニテ被覆 補修スル法	148
第十五章	齒根ニ人工齒冠ヲ附着スルノ 法	156
第十六章	齒根ナキモノニ齒冠ヲ附着ス ルノ法	170
第十七章	齒髓焔衝及枯死論	192
第十八章	齒髓腔ノ充填法	203
第十九章	膿腫治療法	207
第二十章	齒根骨膜炎ノ治法	212

[本文]

図 4 に第一頁を示す。(但し初版、再版では組版が異なる)。

第一章は歯牙組織学が、可成りの頁数を費して詳細に述べられている。これは例言で著者が述べた理由による。

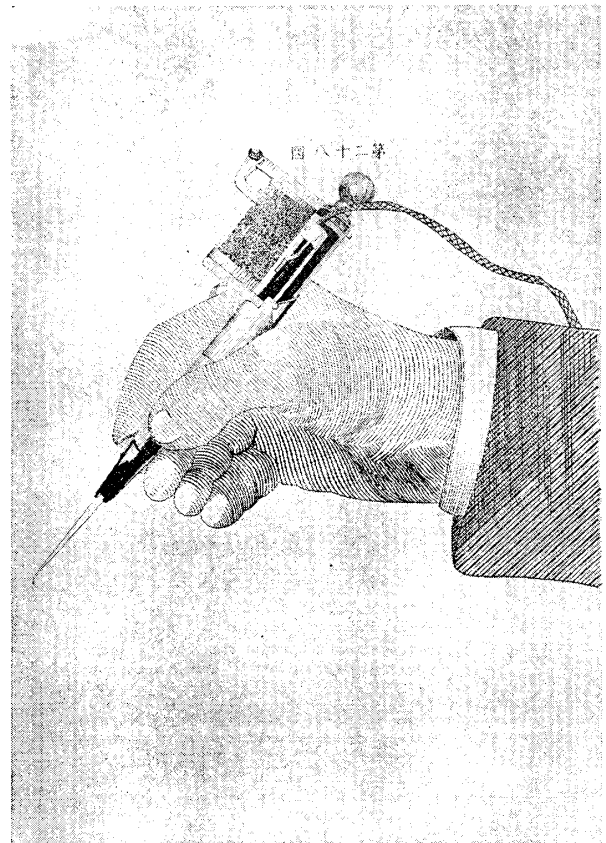


図 5 第28図 電気槌

Fig. 5 Fig. 28 Electric Mallet

第二章では歯列矯正と齲蝕予防が述べられる。この当時迄は、Orthodontia は Operative Dentistry の一分野であった。齲蝕は、当時腐蝕と訳されていた。第三・四章には、ラバーダム防湿法が、図入りで詳述されている点は、当時として進歩的な取扱であったと思われる。もっとも、ラバーダム防湿はすでに1864年 Sanford C. Barnum により開発されていた。

第五章では、充填材料としての金箔、錫箔およびアマルガム（汞収金属と訳している）の調整法を述べる。

第六章では充填用の電気槌（図 5）と改良形マレットの用法を、第七・八章は咬合面および唇頬面窩洞（空窩と訳している）への金箔充填の起始点を図解（図 6）している。

第九章のポルセレンピース充填法は、既製有釘陶歯を削って大凡窩洞に合う様な形態としたものを、塩酸亜鉛セメントで合着するものである。

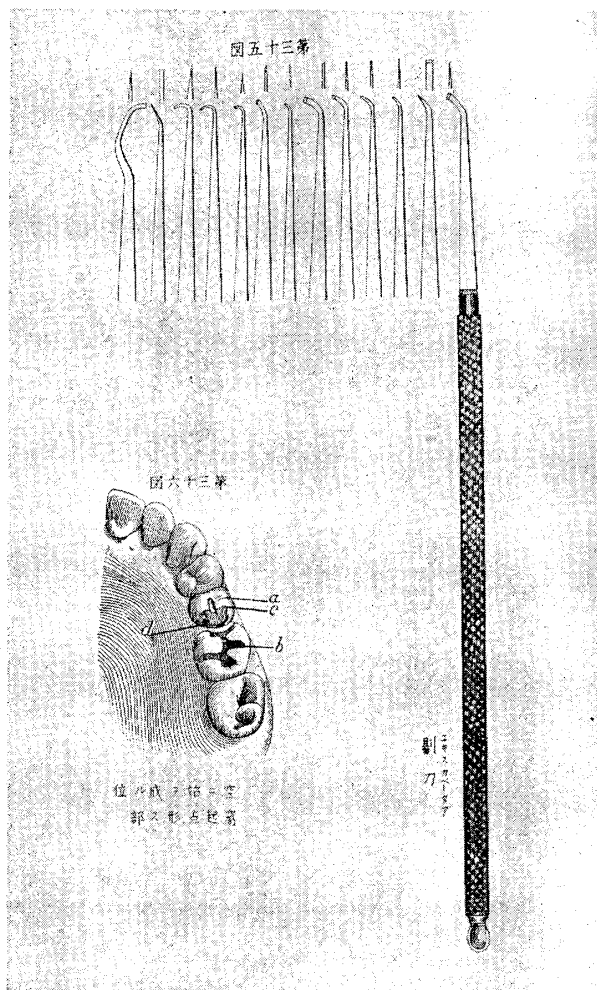


図 6 第35図剔刀 第36図空窩の起始点の部位

Fig. 6 Fig. 35 Excavator Fig. 36 Position of the Starting Point of the Cavity-Condensation

(図7)。

第十章以降十四章迄は、隣接面窩洞と歯牙外周の金箔充填による歯冠修復法の手技を詳細に記述している。

第十五章は合釘継続歯、第十六章は1歯程度の欠損のインレー式ブリッジ等の調整法を解説しているが、鑄造法の無い時代であるので、当然陶歯前装金裏装、鑲着による歯冠継続架工の術式である(図8)。

第十七乃至二十章は、今日の歯内療法学の各段階、すなわち根管治療、根管充填、根端膿腫、歯槽膿瘍療法、等を取扱うが、記述の量は比較的少ない。

全体を通じて見れば、歯科充填学を主体とし

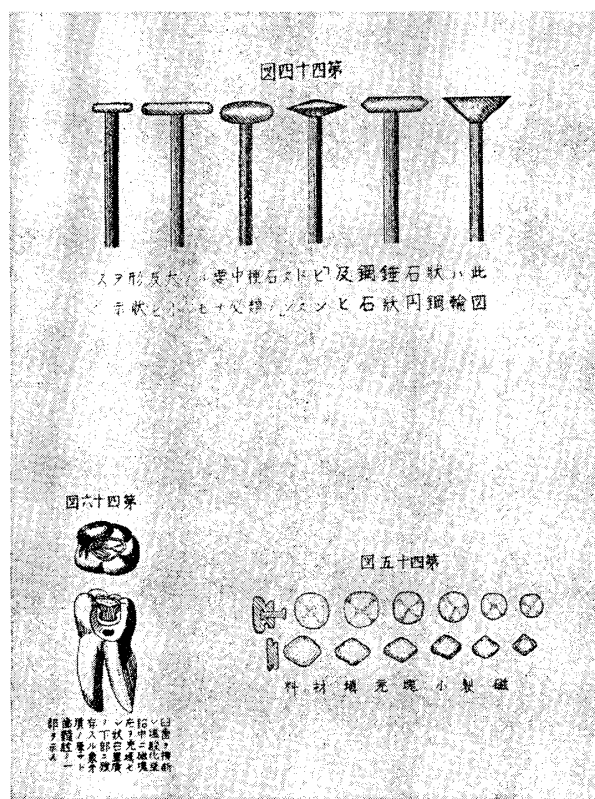


図 7 第44~46図、ポイント類、磁製小塊図解、充填物の図解

Fig. 7 The Points, Porcelain-pieces, Schematic Figure of the Porcelain Filling

て、歯科治療学(歯内療法)に論及するといった構成となっている。

〔奥付〕明治25年8月7日印刷全8月8日出版の初版は正価1円50銭であったが、図9に示す再版ではゴム印で1円80銭に訂正してある。

〔広告〕第1頁目は高山歯科医学院の広告、第2~4頁は、7月28日出版の講義録22号の広告である。現在までに完結したものは、歯科器械学、歯科一班、歯科学術沿革史、歯牙比較解剖学で、残存する現在の科目は歯科応用化学、歯科生理及外科学、歯科薬物学、歯科病理学及び歯科器械一覽であるが、9月発刊第24号迄に誓って之を完結せしむべしとある。第5~8頁は既刊および近刊書籍の広告である。

III. ま と め

本書は、充填学・口腔治療学を体系的にまとめ

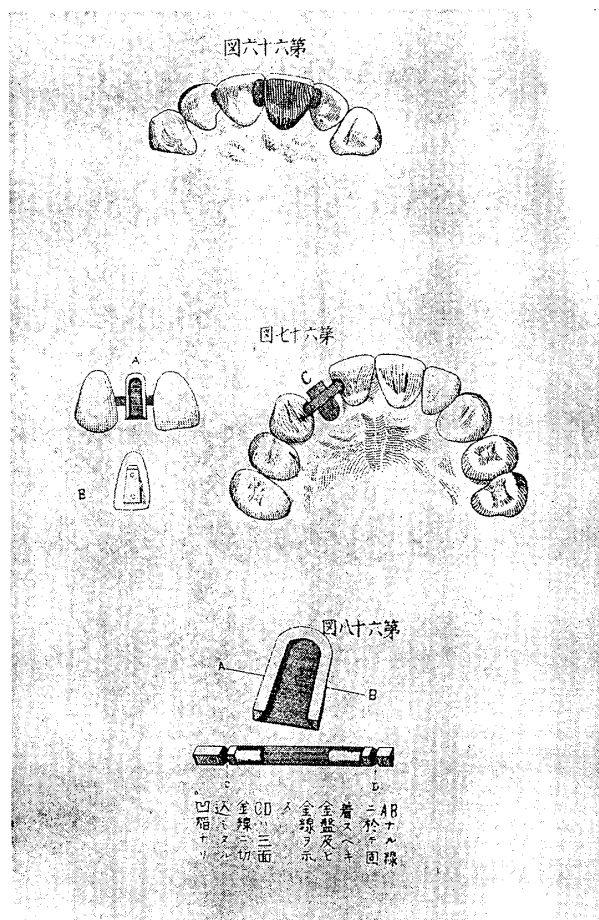


図 8 第66～68図 陶歯前装インレーブリッジ
Fig. 8 The Procedure of Construction of Porcelain Facing with Gold Backing Bridge

た教科書として、明治23年10月～25年9月の高山歯科医学院講義録の完結に先立って、学院の教科書第一号として発行されたものである。

その需要が多かったためであろう、31年再版され、学院の院内生および院外生はもとより、一般の歯科医術開業試験を目指す受験生に好評を拍し

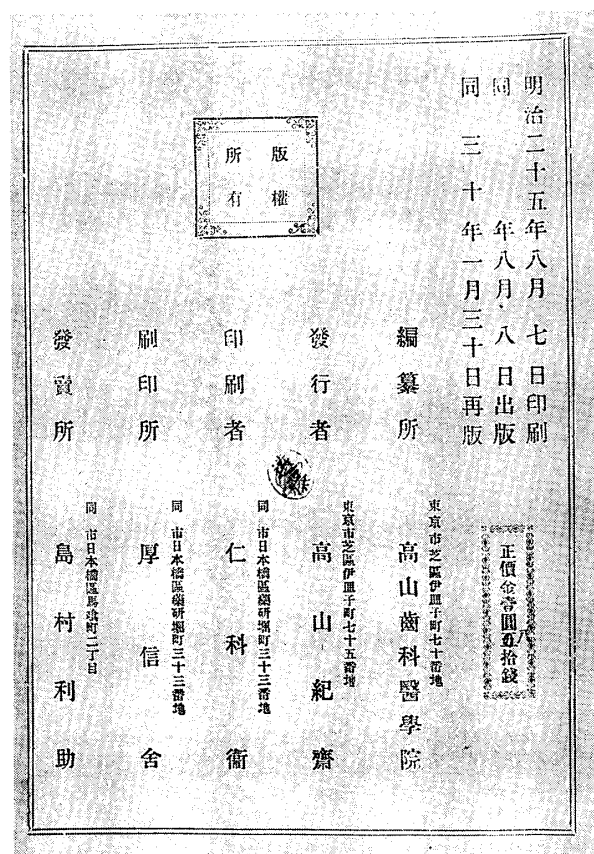


図 9 再版奥付
Fig. 9 The Colophon of the Second Edition

た、当時としてのロングセラーであった。

文 献

- 1) 日本歯科医師会編：歯科医事衛生史前巻，昭和15年10月，東京。
- 2) 森山徳長・石川達也・長谷川正康：高山歯科医学院講義録の書誌学。日本歯科医史学会誌，12(3)：191～198，昭61. 3.
- 3) 高山歯科医学院編：Prospectus of Takayama Dental College 歯科医学叢談1巻3号，明29. 4.